ウェルビーイングユニット：熊本D&Iウェルビーイング地域実装プロジェクト

― 多文化化・孤立化に対応する「見える化→実装→定着」の共通基盤構築 ―

プロジェクトマネージャー：菊池哲平

課題・目的

- 国際的にD&I（DEI）とウェルビーイングは、SDGsや組織ガバナンスの中核課題となり、地域の持続可能性・人材確保・学習／就労成果とも直結している。熊本地域では産業集積の進展に伴い、在留外国人・外国ルーツ住民の増加が見込まれ、多文化共生、スティグマ低減、心理的安全性の確保が急務である。
- 一方で、地域・組織レベルの実態データ（ウェルビーイング、孤立、差別経験、支援アクセス等）が不足し、学校・医療・福祉・自治体・企業の連携も分断されがちで、「理念」が現場で回る実装モデルに落ちにくい。
- そこで本ユニットは、心理学を中核に、複数のサブプロジェクトを束ねる中央ハブ（共通指標・評価・研修基盤）を整備し、熊本で“見える化→実装→定着”を回す大型プロジェクトとして構築する。

取組概要

ハブプロジェクト：（熊本D&Iウェルビーイング“中核”）が、5つの周辺プロジェクトを共通基盤で接続し、成果を統合・横展開する。
SP①支援接続：アセスメント結果を発達支援の成果へつなぐ「支援接続プロトコル」により円滑な支援体制を構築
SP②文化的処方：学内実践～地域（菊陽町等）への波及を通じ、QOL・心の恒常性維持回復を促す実践パッケージを整備
SP③健康寿命延伸（菊陽モデル）：多因子包括介入とデジタル健康データ解析による定量評価の知見を蓄積
SP④DTx熊本モデル：VR×AI×センシングを活用し、感覚・情動の可視化と「生きづらさ」支援の運用知見を獲得
SP⑤孤立社会AIロボット：対話・行動・感情理解に基づく心身状態モニタリングと介入要件（実装知見）を整理

期待される効果

- サブプロジェクト横断で共通指標を整備することで、地域課題の見える化と説明責任（根拠）を強化
- ウェルビーイングに関する介入知見を蓄積し実装モデル（熊本モデル）として提示
- 支援の遅れ・漂流が減り、二次的困難の予防する地域臨床モデルを構築
- 学校・医療・福祉・自治体・企業の連携を図り、セクター横断ネットワークを形成する
- 熊本の多文化化・孤立化への対応を、心理学×社会実装として発信し、地域と大学の研究力・社会的価値を高める

